

東京工業大学 正員 ○ 鈴木忠義
外 著同研究者

まえがき

この報告は計画対象地域、作業期間、作業経費などの条件が決定しおり、観光開発についての何らかの「提案」を結論として求められる場合の地域——今回は九州全域をさして——を対象としている観光開発計画の方法試論である。この場合、観光開発の実効があらわすとは何が、それに到達する過程で広域観光開発計画は何を提案すればよいかというと、次にその提案事項への接続の方法の一例を示していく。

この報告はいわゆる研究グループがいくつか手掛けってきた提案の中から求めてきたものであり、多くの人々の共同討議、共同作業によりおこなわれたものである。

I 広域観光開発の作業内容の決定

(1) 広域観光計画の位置づけ ある地域の観光開発があこなわれるたには、計画のスケールと計画の項目とに相応の関係が存在する。計画のスケールは計画対象の広さ、計画対象の種類の多少、計画事業資金、その他の分類があるが、ここで対象の広さを計画のスケールとよべことにした。計画のスケールは、観光の場合、各国情のいわゆる国際観光というグローバルなスケールからはじまり、ある地域の施設計画にいたるまで、無数の段階が存在する。われわれは次の四段階に区分することを當たりと考えた。

図-I 広さによる計画の段階

I 世界・アジア
II 全 国
III 広域(ブロック)
IV 地域(県・都)
V 1日観光行動圏
VI 地 区
VII 施設・地図

国際間の観光計画が全世界、太平洋地域、極東地域など
日本の全国土を一体として計画する観光国土計画。
全国を8ブロック、或は10ブロックなどにまとめる。
観光的つまり、たとえば国立公園などを地域として考える。
1日で回遊する地域を単位として考える(1日行動圏)
あるまどりをもつた地区または団地として考える。
地図またはそこに設置される施設を考える。

(2) 基本計画項目の決定 計画のスケールに関連して、そのスケールに対応する計画項目と、その項目の内容は、計画の目的、全体のバランス、下段階への関係などから決定される。この場合計画のスケールが決定されれば、使用される四面の縮尺がきまり、表現も決定される。以上の二つから広域観光計画に盛るべき内容はフィジカルな側面のみからみれば、次ページの表-1のようである。そして 各計画のスケールにおいては、前後の各段階との間に情報の入替やわざに生ずる程度度である。その点は注目すべきである。それゆえ、以下この項目にしたがい、その決定手順の例を示すことにとする。

表一 計画のスケールと計画内容の関係

1	計画のスケールによる段階	Ⅰ 索	Ⅱ 地図	Ⅲ 地域	Ⅳ 地域	Ⅴ 地図	VI 地区	VII 方位図
2	作業に主に使われるスケール	1/5,000万～1/25,000万	1/100万	1/100万～1/50万	1/20万～1/5万	1/5万～1/1万	1/5,000～1/1,000	1/1,000～1/100
3	観光地域の構造	—	—	—	—	—	—	—
4	基 本 計 画 項 目 地 域 計 画	作業に主に使われるスケール (含ダミール)	国際的な空港、航路と 主要新規交通路と道路 を直線、折線で示す 量を示す(我が国の場合)	主要新規交通路と道路 を直線、折線で示す 量を示す(我が国の場合)	主要新規交通路と道路 を直線で示す(我が 国の場合は、車両が 走行する方向に並べ て示す)	主要新規交通路と道路 を直線で示す(我が 国の場合は、車両が 走行する方向に並べ て示す)	主要新規交通路と道路 を直線で示す(我が 国の場合は、車両が 走行する方向に並べ て示す)	主要新規交通路と道路 を直線で示す(我が 国の場合は、車両が 走行する方向に並べ て示す)
5	保 護 保 存 地 域 (含 登 山 工 事)	—	—	—	—	—	—	—
6	リゾートエリア	—	—	—	—	—	—	—
7	宿 泊 施 設 (含 スエバ)	—	—	—	—	—	—	—
8	スキーエリア	—	—	—	—	—	—	—
9	ゴルフエリア	—	—	—	—	—	—	—
10	ヨットエリア	—	—	—	—	—	—	—
11	リゾート期間の長い对象 施設	—	—	—	—	—	—	—
12	観 光 対 象	—	—	—	—	—	—	—

2 計画内容決定の一手法

図-2 観光重実地域決定の手順

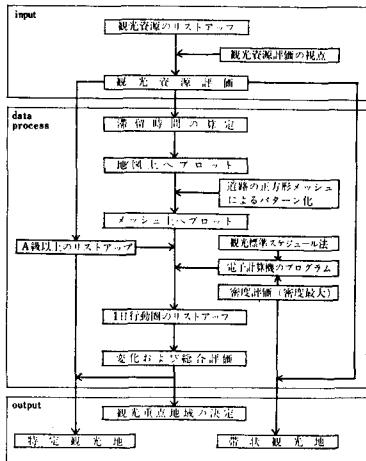


表-2 観光資源評価基準

格付	自然資源	人文資源および無形文化財的なもの	観光対象施設	説明
A級	国立公園に属するもの	国宝	原則としてなし 規模(大) 特質(高) 集積度(高)	わが国を代表する観光資源で、かつ世界にも誇示しうるもの 九州地域のイメージ構成の基調となりうるもの。
	特別名勝	特別史跡		特A級に準じ、その大きな魅力は観光重点地域形成の原動力として重要な役割をもつ。
	特別天然記念物	国重要文化財		九州諸地域を代表する観光資源で特A、A級のつなぎとして重要なもの。
B級	国定公園に属するもの	國重要文化財	(小) (普通) (低)	主として貼民および周辺の地域住民の観光レクリエーション利用に供するもの。
	県指定の名勝	県指定の文化財		
C級	県指定の天然記念物	都市公園		
	市町村指定の文化財	市町村指定の文化財		

図-3 1日行動圏形成の手順

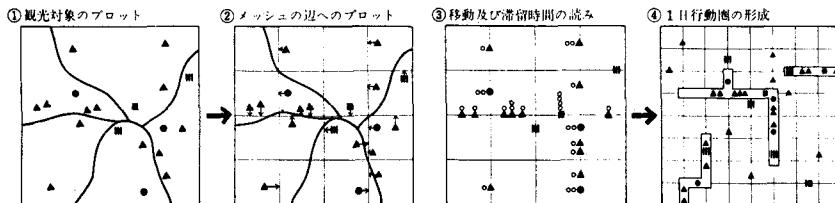
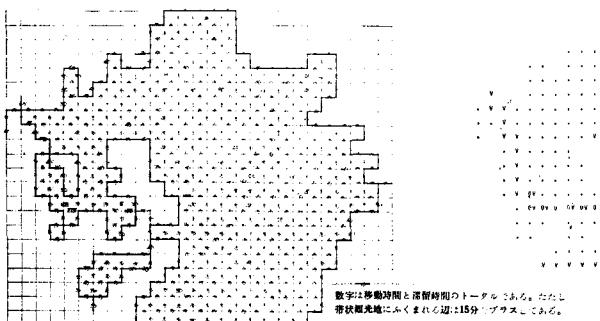


図-4 電算による行動圏の形成



○は移動をふくむ1日行動圏
△は移動をふくまない1日行動圏

(1) 観光地 観光地域の構造

観光地は地区または国地として、まとまりをもったところ、観光地域はそれらが集つて比較的高い観光密度をもった地域と考える。そしてそのような地域と地域がどのように計画対象地域に散在していのかがまずもって決定されなければならぬ。

手順 図-2は作業手順を示すチャートで、これより導かれた評価、密度評価、変化評価をすべてにすぐれていい地域を観光重実地域、密度変化に欠実のある地域を特定観光地、帯状にすぐれていいれば帯状観光地帯を決定する。

評価の視点 資源評価は自然と歴史に重実をあき、自然4種、人文4種、觀光対象施設4種、無形文化財的なもの4種計25種に分類し、表-2のような基準をもつて、有識者によりそれぞれの単独の評価をおこなう。

1日行動圏の形成

図-3のように1日行動圏の形成は4段階の作業によつておこなわれること。

この場合、直路をすべて直線(修正係数0.9)

半径度(10km)とし、

将来の整備を考慮し、

40kmで15分とした。

次に1日の観光行動の標準時間について次の2式をきめ、それに応する地域を求めた。

$$\text{滞留時間} + \text{移動時間} = 8\text{hr}$$

$$\frac{\text{滞留時間}}{\text{移動時間}} \geq 1$$

この方法により九州全域については12の観光重実地域が選定された。

(2) 代表流動観光ルートの決定

すでに選ばれた12の観光重点地域を基に九州ブロックを観光旅行するときに、見落しがならないところ、すなはち代表的な観光コースを選定することを目的とした。それには次の条件を考慮した。

- ① 12の観光重点地域をすべて回ること。
- ② 所要時間最小化すること。
- ③ 流動のイメージビリティと連續性を保つこと。

以上により、現在のルートとかなり異った図-5の結論をえた。

(3) その他の計画事項

重点観光地域、代表流動観光ルートにも山岳地域についての計画（特定観光地、特定流動観光ルートなど）は詳説にゆづることとする。

図-6 広域観光計画の基本計画図
(九州ブロック部分)

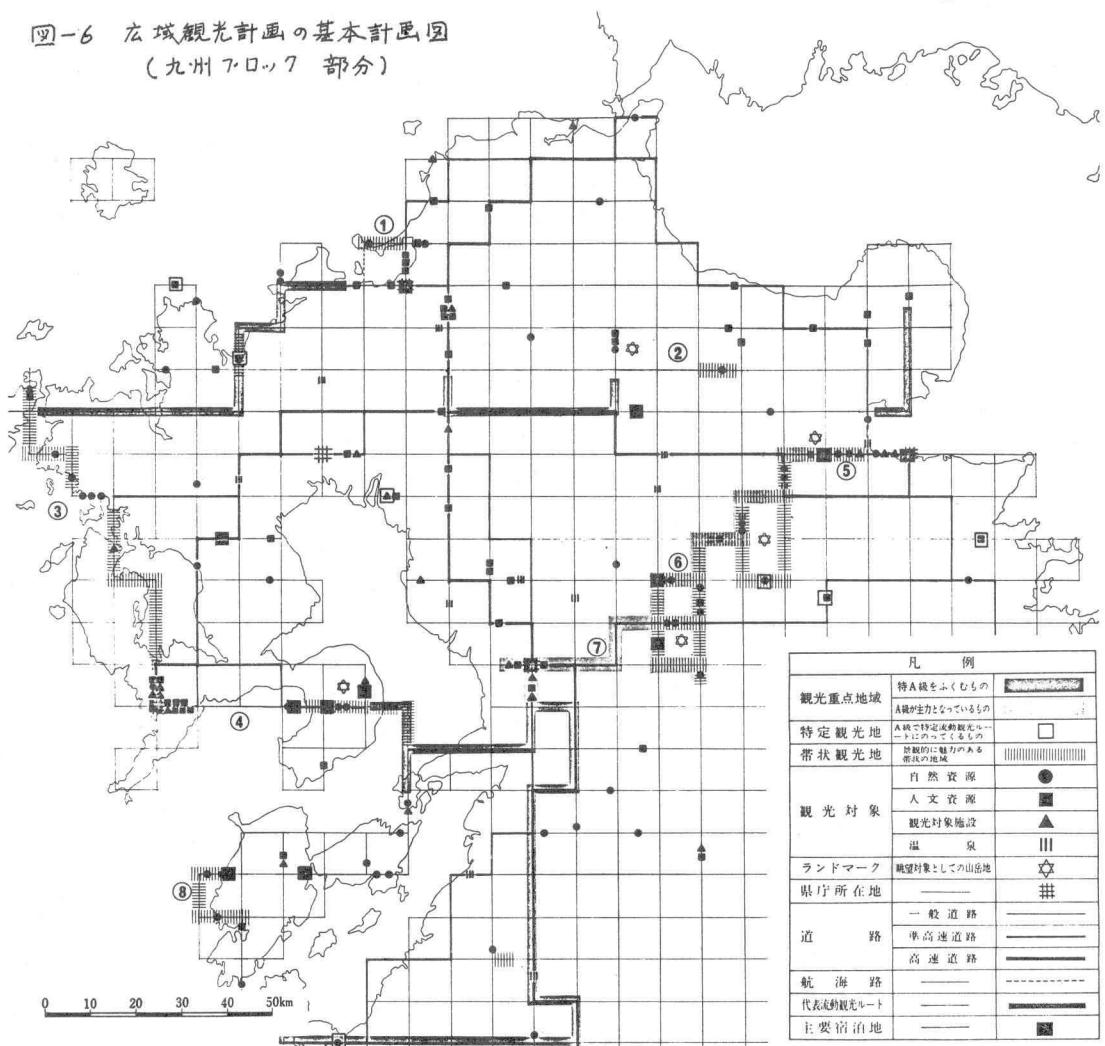


図-5 代表流動観光ルート

